

黒田眞洞『大乘仏教大意』による日本仏教理解の促進

——マックス・ミュラーの『東方聖典』への引用を介しての
ラフカディオ・ハーンの仏教観への影響——

鷹 司 誓 榮

はじめに

黒田眞洞とその主著とされる『大乘仏教大意』について、知る人も少ないと思われる。しかし文学の論評においてはラフカディオ・ハーンの商品内に引用があることにより、村井文夫が取り上げて「ラフカディオ・ハーンと仏教」^{〔1〕}において、八雲が大きな影響を受けた黒田の『大乘仏教大意』に関し、一章を割いて述べ『大乘佛教大意』は、当時の日本の仏教が進もうとする一つの方向に強く規定されていたものであり、決して「一般的概説書、入門者向けの解説書などではなかったことがわかる。」と結んでおり、明治の仏教界の進む方向性を示したものと評価している。そこで、黒田眞洞の思想背景及び、当該著作と合わせ、黒田の第二作目の『仏陀の光』に就ても紹介しておきたい。

次にマックス・ミュラーが『東方聖典』第四九巻において当該

著作を引用し、ハーンが、ミュラー翻訳の『金剛般若経』と共に同書を引用、参照した状況を確認したい。

一 黒田眞洞とその思想背景について

黒田眞洞（一八五五年二月十五日生、一九二六年二月二十五日没）は、幕末から大正初期までの大きな時代の変化の中で育ち、一八九七年からは浄土宗の宗務執綱を務めるなど宗制の整備等に大きな業績をのこした。又、一八八七年に浄土宗の宗学本校の校長になるなど浄土宗の教育制度の整備にも尽力し、当時の宗教界全体の中でリーダーシップをとる人物であった。

黒田の思想が養われた時代は維新前後の廃仏など、仏教界での混乱の時期とも重なり、当時の教育に関して知る手掛かりは少ないが、明治十年に智積院の弘現が行った講義の聞き書きを、黒田自身が製本し保存していたと思われる『成唯識論述記聴書』と題

する資料が手許にある。扉に「明治十年四月十日乃至十一月三日」と正確に期されており、また冒頭に「明治十年丑四月十一日開筵于華頂山 前智積院弘現大和尚説」とあり、この期間に華頂山即ち知恩院において講義があり、黒田が受講していたこと、当時宗派を超えた講義が知恩院内で行われていたことがわかる。また、黒田の蔵書中の『成唯識論述記』第一の巻末には、「明治十五年九月三十八席講此卷畢」からはじまり、明治二十八年まで四度の講義が行われ講了していることを示す書き入れが残されている。明治十年に『成唯識論述記』の講義を受けて以来、自ら明治十五年から二十八年までは講義を行っていたことが確認でき、この間十八年間、『成唯識論述記』に深く携わっていたということとなる。もう一点、黒田の蔵書中、普寂の著書である『撰大乘論釈略疏』分科の巻の見返しに黒田の筆跡にて「徳門和上一代ノ著述若干部一々看ルニ暇アラス撰論ノ疏ノ如キハ実ニ希代ノ重宝人多之ヲ知ラス書肆ニ并テ一本ヲ得 後人ノヲ述時高僧ノ著シタル書ト同一視スヘカラス著述中ノ可否ハ学者ノ取捨スルトコロニ任ス唯取釈ノ論本ト共ニ珍宝スヘシ撰論ノ釈ハ天下只此疏アル耳 明治二十六年六月 沙門眞洞誌」と記されている。普寂の『撰大乘論釈略疏』を『撰大乘論』の最も優れた解説と尊重する姿勢から浄土律の影響を深く受けており、唯識と華嚴の思想は黒田の思想の基盤にあったといえ、又、研究態度についても自主性と効率を重視したと推察できる。

又、後に淑徳女学校設立など日本女子教育の先駆者とされる輪島聞声が知恩院内の大学林に通った際に、当時そこで講師をして

いた黒田に、ここへ何をしに来たのかと尋ねられ、「浄土宗の学問をしに来た。」と答えたところ、「そのためには性相を学ばなければならぬので、泉涌寺へ行け」といわれ、聞声はこれに従い泉涌寺で男僧に交じり一人尼僧として性相を学んだという⁽³⁾。この事からも、黒田が俱舎、唯識の思想基盤を第一義的に重視し、小乗、大乘の分岐点となる思想の違いについては体得していたことは想像がつく。いわば仏教学の原点重視を、後進の指導においても踏襲していたことが窺える。

また、黒田の思想傾向を示す資料として、今岡達音の「黒田眞洞上人⁽⁴⁾」がある。その中に「老師起信の見得は、華嚴事理無礙法界の批判に依りて、解会せられたる者の如し。」とあり、黒田の大乘仏教の理解の根底は華嚴教学によるものであり、江戸時代の浄土律僧、普寂などの影響を色濃く受けていると考えられる。普寂の影響に関しては、西村怜の研究⁽⁵⁾のように、江戸期より大乘非仏説論や『天経惑問』などによつてもたらされた仏教批判に対し既に普寂らの護法論、華嚴等の研究に依つた独自の日本仏教思想が構築されており、黒田もその系譜の中にあつたといえる。

また江戸期の仏教研究を基盤とした黒田の思想を通して、近世と現在の思想界を結ぶことは、日本の近代の思想、哲学、宗教の歴史的理解に資するものであると考える。

日本の近代仏教学は、一般的に、原始仏教主義の西欧の影響を受けて江戸時代の原始的な状態から抜け出し確立したと考える向きが多い。しかし実際には江戸時代の仏教思想は、檀林教育、また宗派を超えた教育環境を背景に非常に高度に発達したものであ

った。

第二次大戦後、雲藤義道は、明治の日本仏教界について「長い歴史の伝統にからまれて、ただちに近代的仏教の成果たる原始仏教主義、あるいは根本仏教主義につくことはできなかった。」と述べている。しかし、マックス・ミュラーが『東方聖典』第四九巻で黒田の『大乘仏教大意』を引用し、自らの経典翻訳の理解の正しさの裏付けとしたことは、西欧の原始仏教主義を転換させ大乘仏教思想の理解を促進させたといえる。長い歴史の伝統に培われた日本仏教思想の紹介により、原始仏教主義から大乘思想の理解へと目を向けさせた時代と捉えるべきではないだろうか。

二 『大乘仏教大意』について

これは、一八九三年のシカゴでの万国宗教会議に際して配布する目的で仏教学会が翻訳を行ったもので、英文は僅か二十七頁のパンフレット形式で、日本大乘仏教の紹介がなされている。

万国宗教会は世界の各宗教の代表者の参加を募り、世界での宗教の理解を深めようと企画され、日本仏教界も宗派を超えた日本仏教としての理解を得ることを参加の目的とした。当該著作の表紙にも校閲者として天台宗 櫻木谷慈薫、真言宗 釋雲照、臨済宗 釋宗演、曹洞宗 高田道見、真宗 村上專精と当時の錚々たる各宗の代表の名前が明記されている。

またシカゴ万国宗教会議においては、事前にその主旨が通達されており、『浄土教報』にもその内容が掲載されていた。その趣旨の一つに、「唯物論の哲学に抗敵する」目的もあった。この主旨を黒

田は十分に踏まえ、執筆したと考えられる。

『大乘仏教大意』は、緒言、第一 施教綱領、第二 解脱涅槃、第三 業報因果、第四 染淨因縁、第五 万法唯心、第六 宗派異同の構成で、仏教の根本思想については、第二から第五の四つの章で説く構成となっている。

翻訳過程も見ておく必要がある。『浄土教報』の後年の記事によると秋原雲来、望月信亨等後の錚々たる学者が関わっており、皆に海外への仏教伝道に対する意気込みがあったことが窺われる。黒田の教義解説が西欧において大きな反響を呼んだことは、科学理論、歴史的思考に対しての宗教、信仰、倫理のあり方についての思索が、日本国内で既に、西欧諸国に劣らず独自に熟成していたことを示すものともいえる。

三 第二作の『仏陀の光』について

『大乘仏教大意』の国内外の評価として、黒田の仏教紹介書の第二作、『仏陀の光』についてさらに述べておきたい。これは一九〇三年大阪で行われた第五回国内勸業博覧会での配布を目的に浄土宗第六教務所の発行したものである。黒田の先の著作『大乘仏教大意』の反響が大きく、第二作の要望となり出版された。この博覧会は最後にして最大の内国博となり、五百三十万人以上の入場があった。

概要は、緒言において小乗と大乘の違いについて業因果、生死論、無我論、空有の論の各論点での比較を行い、第一章において仏教の教旨を述べる中でも空を説くことに重点が置かれた内容

であり、本文四十二頁の内の半分以上にわたる二十三頁を割いている。日本仏教を、すなわち大乘という大きな視野で捉えたものであった。

注目点は、高楠順次郎、南條文雄が校閲をしたことである。高楠、南條は共にミユラーによる浄土教聖典編纂の翻訳に携わっており、黒田の『大乘仏教大意』の当時のミユラーへの大きな影響を熟知していた。

さらに、英文をアーサー・ロイドが校閲をしている。ロイドは英国国教会のSPG宣教師として一八八四年来日し英語教育、仏教研究の第一人者で、一九〇三年からラフカディオ・ハーンの後任として東京帝国大学英文学教授となっている。キリスト教との接点を求めて仏教研究を行いその著作は今も多くの研究者に読まれている。

黒田は、この著書で、凡例の第一に「本書記載する所の仏教の教旨と実行の解釈は専ら支那伝訳の経律論に依り其意を斟酌し簡裁に叙述したるものにして毫も私意を挟まず。」と記しており、あくまで伝来の経論の伝統的解釈によるものであることを明示している。

この『仏陀の光』も好評で、当時在独の渡辺海旭に二百部が送られ、欧州各国の図書館等へ配布され好評を得て、当時ドイツに結成されていた伝道会のザイデン・ステュッカーにより第一作の『大乘仏教大意』と合わせ速やかに独訳の運びとなった。

四 マックス・ミユラーの引用について

マックス・ミユラーが『大乘仏教大意』を『金剛般若経』の翻訳に關しての参考にしている。一八九四年に出版された『東方聖典』第四九卷に『大乘仏教大意』、第五「万法唯心」をほぼ一章全文にわたり引用している。²⁰ シカゴ万国宗教大会開催の翌年の出版であり、この時点で初めて本格的に日本の大乘仏教思想を取り込んで大乘仏典が翻訳されたということもできよう。黒田の引用に至る経緯は次のとおりである。

『金剛般若経』は、日本では真言宗を中心に広く読まれる基本的經典であり、サンスクリット原典から、中国語、チベット語、モンゴル語、満州語と広く翻訳、普及しているものである、中国語からの英訳は、Rev. S. Beal により *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1864-5 にて出版、サンスクリット、およびチベット語からの独語訳は、一八三七年に M. Schmidt により、*Mémoires de l'Académie de St. Pétersbourg* 第4巻一八六頁に掲載され、M. de Harlez はサンスクリットからの仏語訳を一八九三年に *Journal Asiatique* に発表する等、既に多くの欧米語の翻訳が存在する。しかし、これまでの翻訳ではこの經典の真意を欧米人が理解することは非常に難しく、繰り返しの多い經典の形式からも字義通りの翻訳ではナンセンスに響いてしまいかねない。ミユラーは一八九三年九月のシカゴでの万国宗教大会でこの經典の伝える大乘仏教の思想は現在の日本の仏教徒にとって、ごく一般的、基礎的な思想で

あることを知ることとなった。大会会場では、黒田眞洞によって書かれ、日本の六宗派の学者等によって厳密に校閲された大乘仏教の概要が配布されており、その中に示された基本原理の解説を引用することで、ミユラー自身が行った翻訳の正当性を裏付けるものできると考えるに至った。

当時『東方聖典』には、多くの学者が目を通していたことは間違いない、日本在住のラフカディオ・ハーンもその読者であった。彼の蔵書の中にもこの『東方聖典』四九巻があったことが確認できる。¹⁰

五 ラフカディオ・ハーンの引用について

『仏の畑の落穂』所収「涅槃¹¹」と『日本——一つの試論』所収「大乘仏教¹²」について『大乘仏教大意』からの引用がある。竹内信夫は「ハーンの『ニルヴァーナ』について」¹³において「ラフカディオ・ハーンは、ことのほかに、仏教における『ニルヴァーナ』の意味するものを理解しようと努力した人であった。当時のヨーロッパが、一般的趨勢として、再びキリスト教的世界観のうちに狭く閉じ込めらうとしていたときに、ハーンのこのような異文化に対する真摯な関心はむしろ珍しいものであった」として仏教における「涅槃」の概念の理解について、ハーンが重きを置くこの一篇の作品が「ハーンの二十年間にわたる『仏教研究』の結論」としての位置を占めるものと評価している。

竹内は、ハーンが黒田眞洞の『大乘仏教大意』から、さらにまた『東方聖典』第四九巻のマックス・ミュラー翻訳の『金剛般若経』

からも引用がなされていることについて述べている。しかし、ミユラーが黒田の著書からの引用を既に『東方聖典』に掲載していることについてまでは触れられていない。

ミユラーが黒田の文章を参考引用した事も、ハーンは、当然読んでいたと考えられる。同書からの引用内容を見ると、当時の西欧の仏教理解においては、涅槃をすべての消滅と考えた場合、魂の永遠性の否定となり、さらに輪廻転生の主体の消滅となるとして矛盾と捉えられていた。これに対し、単純な分析ではあるが、黒田の概説での「業」の概念においてその問題を解決し得たと考えられる。これは、シカゴ万国宗教大会の主旨の一つ、「不滅の靈魂」の解決にも通ずるところがあるのではないだろうか。

『日本——一つの試論』は、ハーンが、東京帝国大学の教諭の契約を解除され、アメリカの大学で講演を行う予定で、その原稿として書かれたものである、田部隆二は日本についての卒業論文とも評している。そこでも黒田の『大乘仏教大意』が唯一の参考文献となっている。当著作では、スペンサー、ハックスレーなどの哲学解釈を参照しているが、日本の仏教書で参考にされているのは、黒田の著書のみである。十三年の日本滞在中、シカゴ万国宗教者会議もあり、英文、仏文の日本仏教紹介書は複数出版されているが黒田の著書のみが、参照されている。欧米での仏教理解の一番の問題点、靈魂の消滅そして、唯物史観に対しての社会倫理規範を模索する中で、黒田の説く「業」の観念を用いることでこれを解決していったのがハーンの特徴といえると考ええる。

次に、ハーンが「涅槃」に三か所引用した「金剛般若経」の原

文などを合わせた具体的考察を加えておく。

第一章の冒頭

“It is not possible Subhūti, that this treatise of the Law should be heard by beings of little faith, by those who believe in Self, in beings, in living beings, and in persons.”⁽⁵⁾

先ず第一に「自我 (Self)」の存在を否定し、「業 (Karma)」から自意識が生じることに ついて述べ、仏教哲学において個人の輪廻・靈魂の永遠性の否定されることを述べ、自我、自己という概念とその否定が涅槃理解の中心テーマとなっていることがわかる。

第二章の冒頭

“O Bhagavat, the idea of a self is no idea; and the idea of a being, or a living person, or a person is no idea. And why? Because the blessed Buddha are freed from all ideas.”⁽⁵⁾

この章は西欧で「我 Ego」としているものが、一時的集合体「業我 (Karma - Ego)」であり不断に変化するものであり、不変の個性が存在することを否定することについて述べる。そして黒田の『大乘仏教大意』第三章「業報因果」から「The aggregate actions of all sentient beings give birth to the varieties of mountains, rivers, countries, etc. Their eyes, noses, ears, tongues, and bodies, as well as their garden, woods, farms, residences, servants, and maids, men imagine to be their own possessions; but they are in truth, only results produced by innumerable actions」(今我が現生は過去の業影なり。業影を執て自身と思ひ、内にして眼、耳、鼻、舌、身、外にして園林、田宅、僕僮、婢妾、我が所有の思ひをなす。

而して造業無量、牽纏相引て窮極あることなし。過去の過去際を推すも、その始を知らず。) という部分を引いて註に上げている。

第三章の冒頭

“O Subhūti, if I had had an idea of being of a living being, or of a person, I should also have had an idea malevolence...A gift should no be given by any one who believes in form, sound, smell, taste, or anything that can be touched.”⁽¹⁷⁾

この章では『大乘仏教大意』第二章「解脱涅槃」から「To reach the state of the perfect and everlasting happiness: this is the highest Nirvāna. For then all mental phenomena, such as desires, etc., are annihilated. And as such mental phenomena are annihilated, there appears true nature of mind with all its innumerable functions and miraculous actions.」(一切縛着の苦悩を解脱して究竟の樂を得るを大般涅槃となす。癡愛等の心相悉く滅すればなり。癡愛の心相滅するが故に、心性顕現して無量の徳相を具へ難思の業用を示現す。) という部分を註に示している。先の章に述べたことに続き涅槃により滅した後に仏性が顕現するという仏性の絶対性を宗教としての仏教の根幹として捉えてゆく。

『涅槃』収録の『仏の畑の落穂』は、一八九七年の出版で、マックス・ミュラーの『金剛般若経』翻訳から三年程後である。ハーンは、ミュラーの『金剛般若経』の前書中の黒田の引用も注意深く読んでいたと考えられる。また、ミュラーの引用とは別の部分から独自に『大乘仏教大意』の引用も行っており、『大乘仏教大意』を自らも日本仏教理解の手引書として熟読していたと考えられ

る。

次に、最晩年の作品である『日本——一つの試論』収録の「大乘仏教」において注目すべき点は、先にも述べたが、日本仏教に関して実際に参照される文献は黒田の『大乘仏教大意』のみとなっていることである。

引用部は涅槃の第二章とは同じ箇所で第三章「業報因果」からである。

“The aggregate actions of all sentient beings give birth to the varieties of mountains, rivers, countries, etc. They are caused by aggregate actions, and so they are called aggregate fruits. (...) Our present life is the reflection of past actions. Men consider these reflections as their real selves. Their eyes, noses, ears, tongues, and bodies, as well as their garden, woods, farms, residences, servants, and maids, men imagine to be their own possessions; but, in fact, they are but results endlessly produced by innumerable actions. In tracing everything back to the ultimate limits of the past, we cannot find a beginning; hence it is said that birth and death have no beginning. Again when seeking the ultimate limit of the future, we cannot find the end.”

「業の中に就て情類共同の業力を縁として、国土山川の差別を現す、(中略)今、我が現生は過去の業影なり、業影を執りて自身と言ひ、内にしては眼耳鼻舌身、外にしては園林田宅僮僕婢妾我が所有の謂ひをなす。而して造業無量牽纏相引

て窮極あることなし。過去の過去際を推すも其始めを知らず、故に無始生死と言ひ、未来の未来際を窮むるも亦其終りを見ず」

日本仏教の解説であり、特定の仏教概念を解説する目的ではないというこの論考の特徴からとも考えられるが、ハーンが「涅槃」において行ったような多数の經典や經論等からの引用はここでは見られない。業という概念がハーンの一つの解決点となっている。この論考でのハーンの目的は、「仏教哲学の結論と西洋の現代思想の結論との間には、ある近似点があるという問題だけをとりあげ⁽¹⁸⁾」ことであつた。また、この論考の結論として「業」の觀念を「宇宙の道德律、未来に対する現在の倫理的責任、あらゆる思考と行為が無量の結果を生む」と言い換え、日本と西欧の宗教の違いが、「思想の象徴と様式の点でどれほど深かろうとも、両者が到達する道德上の結論は大きく同じ⁽¹⁹⁾」と述べている。「業」に倫理的意味を持たせ、当時の唯物史観に対し、行動規範としての觀念と共に宗教的意義を見出している。

終わりに

黒田の思想基盤である江戸期の仏教教学は唯識、華嚴教学を基盤としたもので、江戸浄土律の影響が残るものである。江戸期よりの伝統教学の基本ともいえる仏教紹介書が、当時のいわば精鋭の学者たちの翻訳を経て、大乘仏教の基本的理解を世界に広めていった一例が確認できたと考える。博覧会の時代といわれた明治期に、黒田の第二作『仏陀の光』においては西欧の神学者も関わ

る組織的な翻訳環境がつくられ、唯物史観、唯物哲学を障害としない宗教、大乘仏教思想の西欧での理解につながったといえる。またマックス・ミュラーの引用により『大乘仏教大意』がさらに多くの学者等へ影響を広げた可能性も推測できる。

ハーンへの言及については、彼の仏教に関する作品において、黒田眞洞の『大乘仏教大意』が宗教あるいは日本文化研究においても用いられて重要な役割を果たしていたことを示し、今後の日本思想史研究において今一度かえりみられるべき著書としての再評価を期待するものである。

- (1) 「ラフカディオ・ハーンと仏教」『比較文学研究』第八五号、すずまわ書店 三八—四九頁
- (2) The Vagradheda, *Sacred Books of the East*, vol.II, Ed. Max Müller, p.xvi-xi
- (3) 谷紀三郎『聞声尼』大正九年、三八—三九頁
- (4) 「黒田眞洞上人」『今岡教授還暦記念論文集』大正大学浄土学研究会、昭和八年、二五—三二頁
- (5) 「近世仏教思想の独創——僧侶普寂の思想と実践——」トランスビュー、二〇〇八年、参照
- (6) 雲藤義道『明治の佛教——近代佛教史序説——』現代佛教叢書、大蔵出版、昭和三年、一〇三頁、参照
- (7) 「社説」『浄土教報』明治二十五年七月十五日、第百十四号、一頁
- (8) 「秋窓偶談」『浄土教報』明治三十二年十月五日、第三百七十四号、九頁
- (9) 「慶應義塾の英語教育を掌握した大学者——A・ロイド」『福沢論吉と宣教師たち』未来社、一九九九年、参照
- (10) *Catalogue of the Lafcadio Hearn Library in the Toyama High School*, Toyama High School, 1927, p.52
- (11) Lafcadio Hearn, "Nirvana" *Gleanings in Buddha Fields*, Boston, Houghton, Mifflin and Co., 1897, p. 220
- (12) Lafcadio Hearn, "The Higher Buddhism" *Japan an Attempt at Interpretation*, New York, The Macmillan Co. 1904, pp.236-237
- (13) 「ハーン「ニルヴァーナ」について」『国文学 解釈と鑑賞』第五六巻 一号、一〇一—一〇九頁
- (14) 田部隆次『小泉八雲』早稲田大学出版部 大正三年、二三三頁、参照
- (15) The Vagradheda, *Sacred Books of the East*, vol.49, Ed. Max Müller, 1894, p.130
- (16) *ibid.*, p.127
- (17) *ibid.*, p.128
- (18) Lafcadio Hearn, "The Higher Buddhism" *Japan an Attempt at Interpretation*, New York, The Macmillan Co. 1904, p.231 及び「大乘仏教」『小泉八雲作品集』十一巻、恒文社、一九六四年、二〇八頁
- (19) *ibid.*, p.250 及び同書、二二六頁
- (たかつかさ・せいえい、仏教学・浄土学、佛教大学大学院)